シリーズ：授業と生徒を語る

「算数・数学と私」

金井秀行（高崎北高校非常勤講師）

初めての授業で自己紹介をする。その際皆さんのことも知りたい、是非「数学と私」というテーマで書いてほしい、と原稿用紙を渡す。締切りはゆるやかにとり、強制はしない。

今まで内容は原則として公けにしなかった。が、このまま自分の胸にしまっておくのは勿体ないと思うようになった。そこで作者の許可を得て一部を公開することにした。

彼、彼女らが出会った先生について

① 嫌な思い出

算数は、私に嫌な思い出をよみがえらせます。小学３年の時でした。その時の担任の先生は、顔がヤンキーみたいで怖く、結構体罰もする、とても恐ろしい先生でした。その人が講義する授業は、すべて嫌だったのですが、特に算数のときはもう本当に嫌でした。算数は国語などと違い、問題の答が一つしかありません。そのため、一つしかない答を見つけるということが、私はとても難しいと感じていました。それでもがんばって苦手な分数の問題を解きノートを見せに行きました。しかし、ノートを見た先生の顔は曇りました。「ちがう」と言って私のノートをポイッと投げました。このように算数の授業の時には毎回ノートを投げられたので、算数が嫌いになったし、精神的にもノイローゼになりそうでした。

（Ｒさん）

②皆で話し合う数学

６年生の時の算数は、担任ではなく、算数担当の先生が教えてくれていました。その先生の授業の仕方は皆に問題について話し合わせ、最後に、先生が説明するという形でした。皆で席を移動しても良かったので、授業はすごく楽しかったのですが、その先生は私のクラスの生徒から好かれていませんでした。なのに、テストの平均点がいつも高いのです。私も、いい点数を取れていました。好きではない先生の授業＝成績があまり良くない、と思っていたので驚きました。でも、その先生は教え方が上手だったので納得です。

関係ないですが、その先生は保護者にだけいい顔をしていたので、生徒から好かれていませんでした。

（Ｙさん）

数学そのものについて

③数学好きにさせてくれた本

私は中学生になるまで数学がそんなに好きではありませんでした。でも嫌いでもなく授業で受ける程度の学習でよいと思っていました。ある日、読書するための本を買おうと本屋さんに立ち寄りました。そこでたまたま手にとった本が私を数学好きにさせてくれました。その本は数学を日常に散りばめた小説であり、著者がいかに数学を愛しているか、数学の面白さを伝えたいかがわかる本でした。それを読んでから私は数学が大好きになり、授業外でも数学

を勉強するようになりました。私はこの本に感謝し、学ぶことの楽しさをこれからも大切にしていきたい。（Mさん）

④まったくやっかいもの

私は小学生のころ、算数が嫌いだった。しかし今は好きなのかと聞かれても、決して「そうだ」とは言えないだろう。そもそも勉強という名の見えない義務が大嫌いだからだ。自らの力となり、生活に役立っているか、がその場でわからないからだ。自分の腕にくっついて、血を吸い、後々赤くはれて痒くする蚊の方がよっぽどましだと私は思う。しかし、教科を問わず、自分の利益となるのは、勉強とかいう死ぬまで逃れることのできない義務なのである。しかしながら、私が数学を嫌うのは、そのしつこさである。蚊であれば、つぶしてしまえばいいが、あいつはつぶしても更に大きくなり、蚊取り線香の効果も薄いのである。

まったくやっかいなものである。新しい教科書をあけると、そこには憮然とした奴がいる。私は、大きな不安と小さな期待と共に、巨大な敵へと、今も立ち向かっている。（T君）

⑤あの問題

数学を学習するようになってから、ある文章をよく見かけるようになった。弟が出かけた数分後に、兄も同じ場所へ出発して追いつく時間を求めるという、よくある問題だ。私はこの問題を見ると、いつも「一緒に出かければ良いのでは？」と思っていた。しかし、ある日から、そういう屁理屈な考え方ができなくなった。自転車で文房具を買いに行った帰りに同じ店へ向かう兄とすれ違ったのだ。私は自転車で時速ａｋｍで店へ向かい、ｘ分買い物をして時速ｂｋｍで帰る途中、私が出発したｙ分後に出発し、時速ｃｋｍで店へ向かう兄とすれ違った。すれ違った瞬間に思い出したのは、あの問題だ。いろんな式やグラフを使えば、兄が出発した何分後に、私と兄はすれ違ったのか、わかっただろう。だから、動く点Ｐとか、池の周りを回る姉妹もあり得なくないだろう。（Aさん）

⑥万国共通の言語

僕は、数学は大好きです。ですが苦手です。でも文系科目のようにわけのわからないことや、問題文も少ないので気が楽です。僕はどうやら負けず嫌いのようなので、難しい問題にもトライしてみたりします。中学ではずっと同じ先生に数学を習っていました。その先生の先生にあたる人は、「数学と道徳を学ぶことが大切」とおっしゃっていたそうです。中学の先生は「川があるところに文明が生まれ、そこで数学も生まれた」とおっしゃっていました。この二つのお話を聞いて、僕は数学を学ぶことは、先人たちの知恵を学び、それをなんらかの場面で生かすことで、人類の伝統を引継ぎ、他国の人と対等に生きるために、万国共通の言語ともいえる「公式などの数学の言葉」を学ぶことに意義があると思いました。（R´君）

⑦新しい発見、驚きや悩み

私にとって数学は新しい発見の連続だ。それを私は面白いと思う。しかし、数学は面白いばかりではない。何時間もかけないと理解できない問題があったり、いくら考えてもわからない問題もある。苦しいと思うときもある。だが、それこそが数学だ。これからも数学に、驚きや悩みを与えられるだろう。私はそれとうまく付き合っていこうと思う。数学も悪い奴じゃないからね！　　（U君）

⑧なんだか気の合わない友人のよう

小学生になる少し前、保育園のクラスで一桁の計算をするのが流行していたのを覚えています。私や友だちは引き算より足し算の方が好きでしたが、その時好きだった男の子だけは引き算を好んでいたのが印象的でした。これが私の中で最古の算数ですが、その時は楽しかったはずの計算が次第に難しくなり、複雑になり、苦手になってしまいました。なのできっと、私は高校を卒業したら、数学に関わることはほとんどないでしょう。しかし、今までのことを思い返すと、小学生の時も、中学生の時も、高校生である今も、算数や数学に苦心している私がいます。いつも私を困らせながら、思い出のどこかにいる算数・数学は、なんだか気の合わない友人のようです。

（Kさん）

⑨算数と私

私には、算数の授業で一番印象に残ったことがあります。小学校四年生の頃、先生が、「この問題がわかる人？」と問題を出して、誰も答えられなかったことです。いつも手を挙げているメンバーでさえわからない問題でした。問題を解くのをあきらめた人たちが、次のページに答がのっているから、と言い、教室中にページをめくる音が聞こえてきました。しかし、私はどうしてもページをめくることができませんでした。ページをめくることの罪悪感があったのです。このページをめくったら、今までの、解こうとした努力が水の泡になってしまう。それが一番嫌でした。しかし先生は、「次のページをめくって！」と言い、仕方なくページをめくりました。

このことは、あまりいい記憶にはなりませんでしたが、この時が一番頭を使った、と私は思います。

（Cさん）

⑩数学の先生って必要なのか

自分は数学にいつも一つの疑問をもっている。中学生になった時からだった。算数から数学と名前が変わっただけなのに、途端に難しくなった。難しいのに授業はすごく早い。高校になると一層ひどくなった。どんどんわからなくなる一方だった。疑問というのは、数学の先生って必要なのかということだ。早く授業を進めるだけで、説明は判り辛い。最後は「復習しろ」しか言わない。どの先生も殆どそうなのだ。授業についていこうとノートを取っても点数は伸びなかった。試しに授業を聞かないで参考書だけやった分野があった。すると普段よりきちんと理解できた。不明な所は友達に聞いた。それだけで点数は伸びた。先生は言うまでもないが教科書そのものもおかしい。参考書の方がずっと判り易い。なぜか判りにくい先生や教科書に頼って勉強しなければいけないのか。これから受験だ。内職という「自学自習」がいいと正直思っている。　　（Y君）

作文群が私の活力の源泉

体験したこと、感じたこと、思ったことが 400 字の中に見事に凝縮されている。発言しない子は何も考えていないなどあり得ないし、誰でも胸の内を率直に表現できるとは限らない。それだけに、これらの作文は貴重である。どの文をとっても、彼らの心の鉱脈に触れる思いがする。なんとしても楽しく、わかり易い授業をしなければ、と思う。

作文をきっかけにして授業の合間や、廊下ですれ違った時、本の名を聞いたり後日談を聞いたりする。「わかった！」パッと輝く笑顔と、魂の独白のような作文群が私の活力の源泉である。